

1. 研究主題

共に学び，高め合う子どもの育成をめざして
～学級力向上に向けた実践をとおして～

2. 主題設定の理由

子どもたちが生きるこれからの社会は変化の激しい社会であると言われ、「生きる力」を育むことの重要性が説かれて久しい。しかし、少子化、家庭の教育力低下、体験活動の減少など、子どもを取り巻く環境は様々な問題を抱えている。そのような環境の中で、子どもたちが、共に協力し合うことや、トラブルを解消しながら仲良くなっていくといった経験は減り、人間関係の希薄化が問題視されている。このような現状において、学級経営をうまく運営していくことは難しくなっており、いくら教科指導を工夫しても学力が伸びないのは、学習者一人一人を支える学級力の低下にも問題があるのではないだろうか。

また、情報化の進んだ現代では、他者と積極的に関わらなくても、独りで学んでいける環境も整っている。しかし、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育む上では、積極的に他者とかがわり、共に学んでいくことが欠かせない。近年、アクティブ・ラーニングといった主体的・協働的に学ぶ学習スタイルが重視されているのも上述の問題を改善し、教育の目的を果たそうとするものである。改めて、子どもたちの学びの質を向上させていく必要を感じる。

本校は、全校児童35名と小規模校であるため、クラス替えはなく、複式学級として異学年の組み合わせで教室内のメンバーが替わることはあるが、同学年としては、6年間同じ学習集団で学ぶ環境にある。人間関係が固定化してしまうという一面もあるが、裏を返せば、互いのことを理解し合い、足りないことを補い合える集団とも言える。そういった意味では、子どもたちが、主体的・協働的に学ぶことができやすい環境にある。

そこで、そのような小規模校の特性を生かして、昨年度から本研究主題を設定し、支持的学級風土を培う学級力向上に向けた実践について研究を深めてきた。その結果、毎月実施した「学級力アンケート」では、全ての学級において、年度当初よりも自分たちの学級を肯定的に受け止める児童が増え、支持的学級風土が高まった。また、支持的学級風土の高まりと共に、学習に前向きに取り組む児童が増えた。さらに、12月に実施した学力調査（2～4年生を対象）においては、全国平均並みの正答率を挙げるなど、研究の成果を感じることができた。

そこで、本年度も「学級力向上に向けた実践」について、さらに研究を深めることとし、「共に学び，高め合う子どもの育成」という本研究の主題に迫っていきたい。

3. 研究仮説

教師が、子どもたちと共に学級力を高めていく学級経営を積極的に行い、支持的学級風土を培うことで、子どもは、課題解決に向けて主体的・協働的に学習を進めていく。また、異学年による積極的な交流を図ることで、自己肯定感や憧れの念を抱き、よりよい自分になりたいと進んで学ぶようになる。そのような主体的・協働的な学びの積み重ねによって、子どもは、学ぶ楽しさを味わい、「共に学び，高め合う子ども」に育つであろう。

4. 研究内容

- 子どもたちと共に学級生活を振り返り、評価する手立ての工夫
 - ・ 学級力アンケートや振り返りカード
 - ・ 評価結果の提示方法 など
- 授業における学び合いタイム（かみやまタイム）の充実
 - ・ 他者とかかわり合うことで解決できる学習課題や多様な考えが生まれる学習課題の設定
 - ・ 課題解決の見通しを持たせる工夫
 - ・ 教え合いを奨励し、自力解決が困難な児童へ積極的にかかわらせる指導
 - ・ スモールステップによる基礎的・基本的な内容を定着させる指導
 - ・ 発達段階に応じた聴き方・話し方の指導の工夫
 - ・ 自分の考えをわかりやすくまとめるノートの書き方指導の工夫
 - ・ 意図的な学習形態（ペアや小グループ）や環境の整備（互いの考えを可視化できる道具やICTの活用など）
 - ・ 学習を振り返る場を設定し、教師による適切な評価や称賛及び児童相互の認め合いを促す手立て など
- 授業以外での具体的な取組の工夫
 - ・ 朝の会や帰りの会の工夫
 - ・ 係活動の工夫
 - ・ 教室環境の工夫
 - ・ 複式学級における異学年集団の活動の工夫
 - ・ 学級のみinnで考え、取り組める活動の工夫 など
- 志々伎っ子タイムの有効活用
 - ・ 基礎的学習内容の定着を図り、互いのがんばりや伸びを称賛し合う工夫
 - ・ 習熟度に応じて、活用問題などをペアや小グループで解決する取組
 - ・ 異学年と一緒に共通課題に挑戦する取組
 - ・ 弾力的な活用を行い、学級力を高めるための活動時間として活用 など
- 異学年交流の工夫
 - ・ ミニ授業参観
 - ・ ミニ合同授業
 - ・ 縦割り班活動の充実

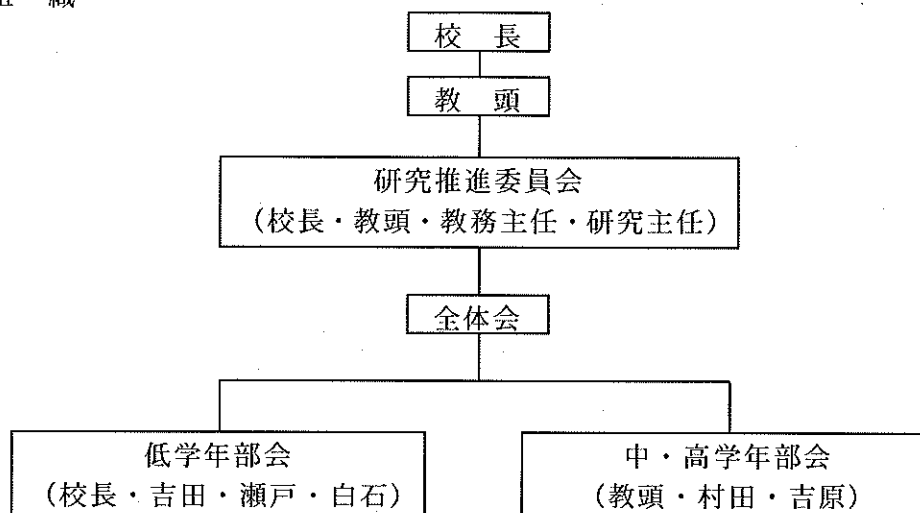
5. 研究の方法

- 研究推進委員会（校長、教頭、教務主任、研究主任）で全体の企画・運営・調整を行い、全体会で共通理解を図り、研究を深める。
- 研究授業の視点を明らかにして、全学級で授業を行い、さらに相互評価を行うことにより、教師の授業力向上を図る。
- 学級力向上に向けた各担任の実践事例について交流する場を設定し、学級独自の取組の紹介やその成果と課題について情報交換を行ったり、学級が抱える問題を解決する手立てについて話し合ったりする。
- 校内研究の時間や研究授業に限らず、互いの取組や授業における学級力向上の手立てや成果について情報交換を行うなど、積極的に相互評価を行いながら研究を推進していく。

- 隔週の火曜日に実施する「子ども理解の時間」などで、各学級の子どもたちの実態について共通理解を図り、全職員で全ての子どもに積極的にかかわっていく。そして、各学級の学級経営に生かしてもらえるよう、子どものがんばりや変容に関する積極的な情報交換を行う。
- 学期末ごとに、児童の変容について話し合い、取組の成果と課題についてまとめ、次学期以降の共通実践事項を明確にして研究を推進していく。

6. 研究組織

(1) 組織



(2) 運営

○研究推進委員会

研究推進委員会は、校長、教頭、教務主任、研究主任で構成し、研究の企画や提案などの検討及び各部の連携と調整を行う。

○全体会

研究推進委員会で計画された案を検討し実践化のための共通理解を図る。また、授業研究・部会等を通して研究内容の深化を図る。

○低学年部会・・・低学年（1，2年）の授業研究を行う。

○中・高学年部会・・・中・高学年（3～6年）の授業研究を行う。

(3) 研修日

○毎月第1・2・4木曜日の15：10～16：30（行事等により変更あり）

○研究授業については、原則として校内研修のある木曜日に設定（時間は担任が指定する）し、午後の校内研修の時間で研究協議を行う。

○研究推進委員会は、必要に応じて実施する。